

残された日

小川未明

青空文庫

長吉は学校の課目の中で、いちばん算術の成績が悪かったので、この時間にはよく先生からしかられました。先生というのはもう四十五、六の、頭のはげかかっていた脊の低い人でありました。長吉は朝学校へゆきます前に時間割りを見まして、自分の好きな作文や、歴史の時間などがあつて、算術の時間がない日には、なんとなく学校へゆくのが楽しみで、またうれしくて勇んで家から出てゆくのでありましたが、もしその日に算術の時間があつたときは、なんとなく気持ちが悪くて、おもしろくない、ゆくのがいやでたまらなかつたのです。

彼は学校の先生からも、また両親からも、

「おまえは算術ができないから、よく勉強しなくちやいけません。それでないと学年試験には落第します。」

といわれるので、長吉も落第してはならないと思つて、家へ歸つてからも、その日学校で習つてきた算術はかならず復習いたしました。しかし、よくよく性分から算術がきらいとみえて、まったく覚えこみもせず、すぐに忘れてしまつて、なにがなんであつたかわからなくなつてしまいました。

彼は独りで、ほかの友だちは、みなそうとうに算術ができるのに、なぜ自分ばかりはこうできないのかと情けなくなつて、机に向かつて涙をこぼしましたこともありましたが。けれど、作文や歴史などは好きなものですから、だれよりもいちばんよくできたのであります。

もうじきに冬の体みがくるのでした。そろそろ学校では試験が始まりました。算術は平常の点数が試験に關係しますので、みないっしょうけんめいに勉強強をいたしました。家の外には雪が二、三尺も積もっていました。そして子供らは、学校から帰ると外に出て雪投げをして遊んだり、角力を取ったりした。雪だるまなどをこしらえて遊んだりして、夜になると燈火の下で机に向かつて、明るく日の学校の課目を勉強強したのであります。今日も長吉は学校から帰ると、自分のへやに入つて机の前にすわつて物思いに沈んでいました。外は雪が晴れていて、子供らがみんなさもうれしそうにして遊んでいる、その声が聞こえてきます。また風を上げている籐のうなり声などが聞こえてきました。長吉は自分も外に出て、友だちの仲間に入つて遊びたいのであります。明日は算術の宿題があるので、まだそれがしてないので、どうしても外に出て遊ぶ気になれなかつたのであります。

すると友だちが門口へ迎えにやってきて、

「長さん、遊びませんか？」

と、つづけざまに呼んでいます。

「長吉や、お友だちが呼んでいらっしやるから、すこし外へ出て遊んできて、また勉強をきなさい。」

と、母がいました。

長吉は思いきつて外へ出てゆきました。けれど、みんななどいつものようにいつしよ
 になつて、愉快に遊ぶ気持ちになれませんでした。彼は独り雪路の上に立つて、茫然
 として友だちらが角力を取つたり、雪を投げ合っているのを見ていたばかりです。

「長さん、角力を取らないか。」

と、一人が彼に向かつていいました。

「いやだ。」

と、彼はくびを振りました。

「どこか気分が悪いのかい。」

と、ほかの一人が、さも心配そうな顔つきをして彼の顔をのぞきこみました。彼は黙つ

ていました。ほかの子供らは長吉が気分が悪いのだと思つて、ふたたび彼に角力を取る仲間に入れと誘わなかつたばかりでなく、あまり自分の悪い友の前で大きな声を出して騒ぐのはよくないと思つて、みんなは遠慮をして遊んだのでありました。

冬の日はじきに暮れかかつて、あなたの黒いすぎ林の頭に寒い西北の風が吹いて、動いているのを見えますと、またちらちらと雪が落ちてきました。いままで、家に帰るのを忘れて手足の指頭を真つ赤にして遊んでいた子供らは、いつしかちりぢりに別れて各自の家へ歸つてしまいました。そして、外はまったく人影も消えて、静かになつてしまいました。

長吉はその夜も机に向かつて算術の宿題を勉強いたしましたけれど、どうしても答えができなくて考えていますうちに眠くなつて、ついに寝てしまいました。明くる日学校へいつてからも算術の時間になるのが気にかかつて控え場にみんなが遊んでいるときでも、長吉はひとりふさいでいました。午前には体操や、地理や、習字の時間があつて、午後からはいよいよ算術の時間があるのでした。

彼は今日はどうか自分にあたらなければいいがと心のうちでそればかり祈つていました。やがてその算術の時間となりました。教師は手に白墨と平素点を記入する手

帳ちやうとを持もつて教きやう室しつに入はいつてきました。いままでがやがやといつていました教きやう室しつの中なかは、急きゆうに火ひの消きえたように寂ひっそり然なりとなりました。やがて級きゆう長ちやうが礼れいをかけてみんながおじぎをしますと、先生せんせいは、じろりと壇だんの上うえに立たつてこつちを見みまわしました。みんなの胸むねの中なかはどきどきしたのです。

「宮みや川がわさん、出でて、宿しゆく題だいの一番ばんめをお書かきなさい。」

と、先生せんせいは大きな声こえでいいました。呼よばれた生徒せいとは頭あたまをかきかき出でて、黒こく板ばんにそれを書かきました。

「みなさん、これでよろしいですか。」

と、先生せんせいは、はげかかった頭あたまを光ひからして、眼めがね鏡ごしにこつちを見みました。

「よろしゅうございます。」

と、みんなが良かったです。

「さよう、これでよろしい。」

と、先生せんせいはいつて、宮みや川がわの姓せいが書かいてあるところへ手て帳ちやうに点てん数すうを書かき入いれました。

「今こん度は……。」

と、先生せんせいはいつて、また一どうをじろじろと見みまわしました。長ちやう吉きちは心こころのうちでどう

か自分（じぶん）はのがれてくれればいいかと、くびをすくめていました。

「吉田（よしだ）さん、出（で）て、第二番（だいにばん）めをお書（か）きなさい。」

と、先生（せんせい）はいいました。長（ちようきち）吉（よし）はやつと自分（じぶん）でなかつたので安心（あんしん）しましたが、吉田（よしだ）

と呼ば（よ）れた生徒（せいと）と自分（じぶん）とはわずかに二（に）、三人間（さんにいだへだ）を隔（へだ）てているくらいでありましたから、な

んとなく脱（のが）れがたいような氣（き）がして胸（むね）がどきどきいたしました。吉田（よしだ）はぐずぐずしてすく

に出（で）ていかなかつたので、いつそう長（ちようきち）吉（よし）は氣（き）がいらいらして、もし自分（じぶん）にあたつたら

どうしよう、このまえのときも自分（じぶん）はできなかつたのだから、きつとしかられるに違（ちが）いが

ないと氣（き）をもんでいました。それでもついに吉田（よしだ）は出（で）てゆきました。そして黒板（こくばん）に答（こた）え

を書（か）きました。それは滞（とど）りなくできていたので、吉田（よしだ）の顔（かお）は華（はな）やいでうれしそうですでありま

した。

「今（こんど）は……第三番（だいにばん）めを、中村（なかむら）さん、出（で）てお書（か）きなさい。」

と、俄（がぜん）然（ぜん）先生（せんせい）の命（めい）令（れい）は、長（ちようきち）吉（よし）の頭（あたま）の上（うへ）に落（お）ちたのであります。彼（かれ）の耳（みみ）は焼（や）ける

ように熱（あつ）くなつて、急（きゆう）に血（ち）が上（のぼ）つて顔（かお）は赫（かく）々（かく）となりました。彼（かれ）は出（で）ても書（か）けなかつたか

ら、いつまでもぐずぐずしていました。すると、

「さあ、早（はや）くおいでなさい。あなたは、してこなかつたのでしよう。このまえのときもし

なかつたじやありませんか。」

と、先生は、かんしやくを起こしていいました。けれど長吉は下を向いて、黙つていてついに出不かつたのです。

「よろしい。今日は帰つてはいけませんよ。後にお残んなさい。」
と、先生は怒つた声でいつけて手帳になにか書き入れました。

長吉は、もうしかたがなかつたのです。心のうちで祈つたことがなんの役にも立たなかつたのです。そしてその日は、ほかの生徒らが勇んで帰つてしまつたにかかわらず、独り教室に残つていたのです。広い教場の中に、ただ自分ひとりぎりになると急に四辺が寒く、わびしくなつて見えました。いままでそこには知つた顔があつたのが、まったく空漠となつて机だけがならんでいるばかりです。そしてうす濁つたように曇つたガラス窓とおして外を見ますと、灰色の寒そうな空が低く垂れ下がっていて、一面下には雪が積もつているのです。

だんだん時がたつに従つて、長吉は心細くなつてきました。そして、いまごろお母さんは自分の帰りが遅いからどんなに心配していなさるだろうと思ひますと、かえつて自分は気が気でなかつたのです。そのとき、寒い風に吹かれてどこからともなく、か

さすが一羽飛んできて、窓ぎわに立っていたかきの木の枯れ枝に止まりました。そしてくびをかしげてこちらをのぞいて、

「あほう、あほう。」

とあざけるようになくて、またいずこへとなく飛び去ってしまいました。長吉はもはや胸の中が悲しみでいっぱいでしたから、これに対して怒る気にもなれませんでした。彼はただ母親がどう思つて心配なさっているだろうかと、そればかり考えていたのです。からすが飛び去つた後、まもなくすずめが二、三羽やはり同じ枝にきて止まつて、窓の内側をのぞくようにしていませんでした。しかしそれは、なんとなく哀れな長吉の心のうちを知つて、それに対して同情しているように思われましたので、長吉は窓のきわへいつて、すずめのほうに顔を寄せて、

「お母さんのところへいつて、私は今日算術ができなくて残されたからといつておくれ。」

と、小声で切に頼んだのであります。すずめはさながらこの依頼を聞き分けたように、やがて小声になくて、いずこへか飛び去つてしまいました。するとほどなく先生がこの教場に入つてきました。長吉は先生の前へ呼び出された。

「あなたは勉強強しないんでしょう。勉強強をしてわからない道理がない。」

と、先生はいいました。長吉は、いったいだれがこの算術の法則を考え出して作ったものか、よほどその人は偉い人であると同時に迷惑なことを考えたものだ。それがために自分は、こんなに苦しまなければならぬのだと思いました。

「先生、あなたが算術というものをお作りになったのですか。」

と、長吉は突然、先生に問いました。先生は驚いたというふうで、

「いいや、私が作ったのではない、前からできていたのだ。」

と、低い体を動かしながらいいました。

「先生、なんでもうすこし容易く道理がわかるように、その人は算術を作らなかつたのでしょうか。私には、むやみに暗誦したり、法則を覚えてしまうことができないのです。」

と長吉は、先生に向かつて訴えるごとくいいました。

「おまえばかりではない、みんながそれを覚えて、りっぱにできるじゃないか。それをできないのは、やはりおまえが勉強強せんからなんだ。」

と、先生はかえつて長吉をしかったです。

長吉はやつと免されてその日の暮れ方学校の門を出たのであります。彼は路を歩きながら、算術や、暗誦などのない、すずめの世界やからすの世界がつくづく恋しくうらやましかつたのであります。そして、なんで自分はすずめに生まれてこなかつたろうかと思ひました。彼は先刻、学校の窓のところですずめに向かつて、お母さんに伝言をしてくれるようにと切に頼んだが、なにかいつてくれたかしらと思ひながら家に帰つてきました。すると、母親は、たいへんに長吉の帰りが遅いので心配して門口の雪の上に立つて待つていました。そして我が子の顔を見ると、

「まあ、どうしてこんな遅くなつたのだ、日が暮れるじやないか。」

と、飛び立つように聞きました。長吉は、心の中で、そんならあれほど頼んだのに、すずめはなんにも、きてお母さんに告げてくれなかつたのかと思ひ、つくづく鳥などというものは真につまらないものだ。やはり人間ばかりがいちばん偉いのだということを感じたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976 (昭和51) 年11月10日第1刷

1977 (昭和52) 年C第3刷

初出：「処女」

1916 (大正5) 年1月

※表題は底本では、「残《のこ》された日《ひ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年10月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

残された日

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>